

北山村観光センター
Tel: 0735-49-2324
北山村下尾井335
www.vill.kitayama.wakayama.jp/raft/
MAP・P23 ©

「川は生きていてルールもない。
流れのクセや
隠れている岩を知り尽くし、
わしら筏師が息を合わせて操作する」



雄大な自然に囲まれた北山村。澄み渡った空気と優しい時間がゆっくり流れる。

人口540人の飛び地の村 夢は年間乗客1万人

東牟婁郡北山村
北山川・筏師

川は暮らしの動脈だった

白く逆巻く瀬のなかに、筏がおどろこむ。清冽なしぶきがはねて乗客の音が峡谷にこだまする。次々と迫る巨岩を筏師たちが巧みな櫂さばきですり抜けると、また喚声があがった。ひとしきり翻弄されると、一転、おだやかな流れに変わった。切り立つ両崖に瑞々しい緑が萌えて、鳥のさえずりが頭上から降ってくる。シカやサル姿も見られるというので目を凝らしていると、不意をつかれてまた荒くれた瀬に突入した。

紀伊半島中央の深い森に抱かれた和歌山県北山村では、世界で唯一の筏くだりが楽しめる。五・五キロのコースを約一時間でくだるスリル満点のクルーズだ。

北山村は、和歌山県でありながら、三重県と奈良県に囲われた全国唯一の飛び地である。飛び地になった理由を、筏が答えてくれる。道も整備されていかなかった昔から、川が暮らしの動脈だった。この地に産する木材は筏に組まれ、北山川から熊野川を経て新宮に運ばれた。その結びつきを大切に、明治期に新宮と同じ和歌山県に属したのである。

やがて川にダムができ、トラックが普及して筏流しは絶えた。その頃から過疎化が進み村に活気がなくなってきた。

これを憂い、立ち上がったのが元筏師だった役場勤めの久保岡博さん。こうして、一九七九年に「観光筏くだり」として復活した。「昔は、筏師の稼ぎも良かったし、新宮でももてたもんです。村には威勢の良い若い衆が一杯いました。そんな元気を取り戻したいと思ってダムを管理する電力会社や下流の自治体などに協力をお願いし、小型船舶の免許を苦勞して取りました。」と振り返る。

当初は本職の筏師が操ったが、二〇年を経て高齢化が進んできた。そこで、北山村ふるさと振興公社が九八年から筏師養成制度をつくり、県内外から応募者を募った。

先輩と若手が息を合わせて

山本正幸さんは、第二期生である。

り尽くし、筏師が息を合わせて操作するよう心がけています」

筏師の朝は早い。六時には乗り場の崖上にある作業所に集まって、降り場からトラックで運びあげた筏を点検し、研修中の若い筏師たちが谷に渡したケーブルで数十メートル下の川面まで吊り降ろす。八本の杉の丸太を組んだ筏を「床」といい、七床を連ねて長さ三〇メートルの「一乗り」の筏ができる。今日は午前と午後の二乗り、それに訓練用の四乗りを組み立てる。山本さんの恩師でもある久保岡さんは、七五歳を超えた今も現役だ。

人口が10人増えた

久保岡さんや山本さんの悩みは、若い人たちがいかに定着させるかということである。筏師の格好よさに憧れて全国から応募してくるが、地道な仕事も多く厳しい修業に耐えられずに挫折する人も少なくない。冬場に備えて生活基盤づくりも重要だ。一ターンの組の廣川さんは、和歌山県の「緑の雇用制度」を利用して移住、今も山仕事に取り組んでいる。村とふるさと振興公社でも、特産の柑橘「じゃばら」の作付けを増やし、温泉や道の駅、キャンプ場の整備などに取り組んできた。その甲斐あって、六百人弱の北山村は、この一年で人口が10人増えた。農林水産大臣賞や毎日・地方自治大賞優秀賞も受賞している。

それを将来につなげるために、山本さんは筏くだりの年間乗客数を今の八千人から一万人の大会に乗せたいと考えている。



右：筏師の1日は、早朝筏を組むところから始まる。ベテランの指導を受けながら若い筏師が飛び回る。左：いくつかの瀬を除けば、コースのほとんどはゆったりとした流れ。川岸の森からカモシカが顔を覗かせることもある。



久保岡さんが観光客を乗せた筏に乗ることはほとんどないが、そのすぐ後ろに続く練習用の筏に乗り込み、研修中の筏師の指導にあたっている。

久保岡さんからバトンを引き継ぐ山本さん。とても穏やかな人柄だが、年間乗客数を1万人の大会に乗せたい、と静かな闘志を燃やしている。



北山村の「じゃばらドリンク」をプレゼントします。詳しくは23ページへ